

---

## イ. ウェストミンスター信仰告白書の 神学的 構造

---

ウェストミンスター信仰告白書は、それを作成した総会員たちの多様性によって、不可避にして折衷された文書です。<sup>20</sup> ウェストミンスター信仰告白書は、改革神学において共通的に同意する内容と、叙述によって作成されました。ウェストミンスター信仰告白書は、新しい神学の形態と内容を叙述しようとしたのではなく、神の御言葉と最も一致することを叙述しようとした目的をもっていました。それゆえ、ウェストミンスター信仰告白書が叙述している神学的内容は、改革神学が言及している一般的なものです。それにも関わらず、総会は、何より先ず 39 箇条を改訂する作業から始めたのです。そして、総会は「厳粛同盟と契約」を通して、<sup>21</sup> 総会がすべきことを定め、信仰告白書を作成する時は、三委員会に分かれて、その主題が分配されました。

---

20 Robert Letham, *The Westminster Assembly* (Phillipsburg: P&R, 2009), 111.

21 それによってジェームズ・アッシャーの影響と共にアイルランド教会の信仰告白書である 1615 年の Irish Articles また、ウェストミンスター信仰告白書作成に影響を与えました。(Alex Mitchell ed., *Minutes of the Sessions of the Westminster Assembly of Divines*, liii)

このような背景によってウェストミンスター信仰告白書は、構造において特徴を持つようになりまし<sup>22</sup>た。また総会は、各委員会が報告したのを、最後の作成段階で、その配列を決めていたので、ウェストミンスター信仰告白書の構造は、ヨーロッパ大陸の信仰告白書と比較した時、その特徴を持っています<sup>23</sup>。従って、ウェストミンスター信仰告白書の章別構造に示される特徴は、次のようです。

### 1) ウェストミンスター信仰告白書 1 章：聖書

ウェストミンスター信仰告白書 1 章は、聖書に関することです。ベンジャミン・ウォーフィールド (Benjamin Warfield) は、ウェストミンスター信仰告白書 1 章が聖書を扱っているのは、信仰告白書の根拠であり、出発であり、その教理の体系が聖書に根拠していることを明らかにさせるためだとしました<sup>24</sup>。このように、信仰告白書の第 1 章で聖書を扱っているのは、ウェストミンスター信仰告白書が初めてではありません。総会に招待されていたが参加はしなかったジェームズ・アッシャー (James Ussher) と、彼が作成した「Irish Article of Religion (1615)」では、聖書を一番先に扱っています。

---

22 Alex Mitchell ed., *Minutes of the Sessions of the Westminster Assembly of Divines* (Edmonton: Still Waters Revival Books, 1991 [1874]), 112, 164. 第一委員会には、神と三位一体、神の聖定、創造、摂理、堅忍、キリスト者の自由、教会、聖徒の交わりの主題などが配分されていて、第二委員会には、人間の墮落と罪、そして審判、自由意志、恵み契約、仲保者キリスト、教会の役員、大会と礼典、洗礼と聖餐の主題が配分されました。そして第三委員会には有効な召し、義認、養子となる、聖化、律法、信仰、礼拝の主題が配分されました。(Alex Mitchell, *The Westminster Assembly Its History and Standards*, 359 参照)

23 フランス信仰告白書(1559)、ベルギー信仰告白書(1561)と比較することができます。

24 Benjamin Warfield, *The Westminster Assembly and Its Work* (Edmonton: Still Waters Revival Books, 1991 [1959]), 155.

そのようにウェストミンスター信仰告白書1章で、聖書を扱うようになったのは、総会に参加していたスコットランド神学者であったジョージ・ガレスピー (George Gillespie)の主張によることでした。<sup>25</sup>

ウェストミンスター信仰告白書1章で、聖書を扱いつつ、教理と神学の根拠が聖書にあることを明示したのは、その当時のローマカトリック主義と道徳律廃棄論主義、クエーカー主義に反論するためでした。ローマカトリックは、教理を述べる時に彼らの伝統を重要視し、道徳律廃棄論主義とクエーカー主義者たちは、幻的体験を聖書以上に価値あるものと思っていたので、彼らに対して論駁するために、ウェストミンスター信仰告白書1章で聖書について叙述したのです。<sup>26</sup>また、ウェストミンスター信仰告白書1章2項では、旧新約聖書別目録が並べられ、3項で外典について叙述した理由は、ローマカトリック教会は、外典を自分たちの聖典の中においたからです。<sup>27</sup>

## 2) ウェストミンスター信仰告白書3章：神の永遠の聖定

ウェストミンスター信仰告白書3章は、神の永遠の聖定 (God's Eternal Decree) を扱っています。ウェストミンスター信仰告白書2章で、

---

25 David Hall, *Windows on Westminster* (Norcross: Great Commission Publications, 1993), 60, 61.

26 David Dickson, *Truth's Victory over Errors: or The True Principles of the Christian Religion* (Glasgow: John Bryce, 1764), 30. A. A. Hodge は、ウェストミンスター信仰告白書1章を持ち、19世紀の肯定哲学者であったオーギュスト・コント、ジョン・スチュアート・ミル、ハーバートスペンサーに対して論駁しました。(A. A. Hodge, *Commentary on Confession of Faith*, 45)

27 A. A. Hodge, *Commentary on Confession of Faith* (Philadelphia: Presbyterian Board of Publication, 1869), 54.

三位一体教理を扱った次に、神の聖定を扱っているのは、ウェストミンスター信仰告白書の構造の特徴です。<sup>28</sup> 予定の神秘を慎重に、気をつけながら扱うために章を割きました。総会の総会長ウィリアム・トワイス (William Twisse) は、墮落前選り論者でした。彼は、墮落前選り論が論理的にバランスが取れていると主張しました。しかし、反対する者たちは、墮落前選り論は、神を罪の著者と見ていと述べたのです。結局、総会はこのような論争はしないようにとのことでした。<sup>29</sup> そして、続けられる議論の中で、聖定に対する単語も複数より単数として叙述します。<sup>30</sup> このように、神の永遠の聖定を扱ったのは、その当時の教会の状況によったことですが、英国国教会がアルミニウス主義に片寄っていたからです。<sup>31</sup>

### 3) ウェストミンスター信仰告白書 7 章 : 神の契約

ウェストミンスター信仰告白書 7 章は、契約神学を扱っています。ウェストミンスター信仰告白書 7 章では神の契約を、行い契約と恵み契約とに区分しています。行い契約という用語を使用したのは、トーマス・カートライト (Thomas Cartwright) と、

---

28 Charles Brown, "The Leading Features and Excellencies of the Westminster Standards" in *Bicentenary of the Assembly Divines* (Edinburgh: Kennedy, 1843), 108.

29 Robert Dabney, "Doctrinal Contents of Confession: Its Fundamental and Regulative Ideas, and the Necessity and Value of Creeds", in *Memorial of the Westminster Assembly 1647-1897* (Richmond: The Presbyterian Committee of Publication, 1897), 97, 98.

30 Alex Mitchell ed., *Minutes of the Sessions of the Westminster Assembly of Divines*, 150.

31 T. D. Witherspoon, "The Westminster Assembly" in *Memorial of the Westminster Assembly 1647-1897* (Richmond: The Presbyterian Committee of Publication, 1897), 62.

ダドリー・フェナー (Dudley Fenner) からです。<sup>32</sup> 彼ら以降は、ウィリアム・パーキンス (William Perkins)、ジェームズ・アッシャーが行い契約と恵み契約とに区分して使用しました。<sup>33</sup> そして、ウェストミンスター信仰告白書が作成される当時、契約神学についてジョン・ボール (John Ball) 「A Treatise of the Covenant of Grace (恵み契約の論文)」という作品が直接的な影響を与えますが、<sup>34</sup> Ball もやはり行い契約と恵み契約とに区分して神の契約を説明しました。ウェストミンスター信仰告白書 7 章は、このような歴史的背景の中で叙述されたのです。ウェストミンスター信仰告白書 7 章 1 項では、創造主・神が、自発的に低くなられて (condescension) 被造物である人間の所に来られて契約を施してくださったことを強調しています。<sup>35</sup>

そして、契約の要素においては、神の主権と人間の責任を同時に強調しています。ウェストミンスター信仰告白書 7 章 2 項以下から、神の契約を、行い契約と恵み契約とに区分しました。人間の行いによって救いを成し得ないことを強調し、ただ、神の恵みによって救いが起こされることを説明しています。そして、恵み契約を救済史的観点で説明しました。一方では、律法を恵み契約の中に含めています。ウェストミンスター信仰告白書 7 章の神の契約に対するこのような説明は、人間の責任だけを強調し、神の主権を無視したアルミニウス主義を排撃するためであり、

---

32 Andrew Woolsey, *Unity and Continuity in Covenantal Thought* (Grand Rapids: Reformation Heritage Books, 2012), 443.

33 William Perkins, *Golden Chaine* (Cambridge: Cambridge University, 1600), 36; James Ussher, *A Body of Divinity* (Birmingham: Solid Ground Christian Books, reprint 2007), 110.

34 この作品は清教徒たちの中で好意を持たれウェストミンスター総会員であったエドワード・レイノルズ (Edward Reynolds) とエドモンド・カラミー (Edmund Calamy) と他の総会員たちによって推薦された作品でした。 (Alex Mitchell, ed., *Minutes of the Sessions of the Westminster Assembly of Divines*, Ix)

35 *Westminster Confession of Faith*, 7.1.

一方で、神の主権だけを強調し、人間の責任を無視した、道徳律廃棄論主義に対する反論の目的がありました。<sup>36</sup>

#### 4) ウェストミンスター信仰告白書 10-18 章：救いの過程(順序) とキリストとの結合、以下、救いの証拠

ウェストミンスター信仰告白書 10 章から 18 章までの叙述は、救いの過程(Ordo Salutis) の形式を持っています。<sup>37</sup> 清教徒の中で、救い順序方式の叙述は、ウィリアム・パーキンス (William Perkins) の「Golden Chain」 (1591) からでした。<sup>38</sup>

---

36 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making*, 95.

37 救いの過程(Ordo Salutis) という用語は、1720 年代前半にルター派神学者たちによって使用され始めました。(Hendrikus Berkhof, *Christian Faith*, 478) 改革神学での一般的な救いの過程に対する順序は召し-新生-信仰-義認-聖化-聖徒の堅忍-栄化です。(Muller, *Calvin and the Reformed Tradition*, 161)

しかし、ウェストミンスター信仰告白書では、整形化された救いの過程を強調しているのではなく、恵みの原因と効果によることと、そして、贖いの適用によって、恵みの段階に伴う救いの過程を語っています。これについて李殷善 (Anyang University 歴史神学教授) は、ウェストミンスター信仰告白書で救い過程という用語は使用するが、救いの過程に関心を持っていたが、それは、論理的順序に配置されたのではないと、語っています。(李殷善、ウェストミンスター信仰告白書の救済論, 122, 123)

それにも関わらず、トーレンズは、ウェストミンスター総会の神学者たちの救いの順序は、キリストとの結合に導こうとする一連の過程を持っているとしました。(T. F. Torrence, *Scottish Theology*, 129) トーレンズの指摘は、聖霊の有効な御業によって起こされた信仰によって、キリストを受け入れるのと、それによってキリストとの結合を説明した大教理問答 68-70 を、理解できていなかったように見えます。

たとえ、ウェストミンスター信仰告白書でキリストとの結合教理に対して章を割いて扱ってはいませんが、13 章 1 項、16 章 6 項、17 章 2 項は、キリストとの結合教理について説明をしていて、11-13 章の全体を見ると結合教理を説明しています。さらに李殷善は、ウェストミンスター信仰告白書 11 章と 26 章 1 項、28 章 1 項も結合教理を説明しているとしました。(李殷善、ウェストミンスター信仰告白書の救済論, 122, 123)

パーキンスが救いの過程方式を選んだ理由は、予定を説明しようとする弁証的目的がありました。人間の行為、あるいは、協力が救いの要素ではなく、神の恵みだというのを説明するためでした。そのため、パーキンスの救いの過程方式は、組織的と言うより、救いの原因的順序を説明するための目的であって、その内容は、恵みの実行に焦点をおいています。<sup>39</sup>このような救いの過程方式の叙述は、ウィリアム・エイムズ (William Ames) に継がれました。<sup>40</sup>従って、ウェストミンスター信仰告白書の救いの過程方式の叙述は、パーキンスとエイムズの著作から影響を受けたものです。<sup>41</sup>

ウェストミンスター信仰告白書3章で神の聖定、ウェストミンスター信仰告白書7章では神の契約、そして、ウェストミンスター信仰告白書8章では、恵み契約の仲介者としてキリストを扱いました。このような構造と順序は、救いの根拠を説明するためです。そして、ウェストミンスター信仰告白書10章で有効召命から始まって、救いが実際化されるのを進行的 (ongoing) に、そして完成に向かって (outworking) 行くことと説明しました。<sup>42</sup>ウェストミンスター信仰告白書10章の有効召命は、救いが、ただ神の恵みによることで、人間には、どのようなこともないことを明示しています。特に、信仰と悔い改めは神の選びが根拠となっているのを確かに行っているため、それは、その当時のアルミニウス主義を論駁するためでした。ウェストミンスター信仰告白書11章は、義認を扱っていますが、有効召命と連結させています。

---

38 William Perkins の *Exposition of Symbole* (1595) も、救いの過程方式を選んでいますが。

39 William Perkins, *Golden Chaine* (Cambridge: University of Cambridge, 1600), 23.

40 William Ames, *The Marrow of Theology* (Grand Rapids: Baker, 1997 [1629]) 参照。

41 Alexander Mitchell, *The Westminster Assembly. Its History and Standards*, 344.

42 John Leith, *Assembly at Westminster: Reformed Theology in the Making*, 246.

義認を、神がご自身の選んだ民に恵みを施した（聖霊によってキリストに彼らを導き出した）結果として説明しています。

ウェストミンスター信仰告白書 11 章 1 項は、ローマカトリックの義認教理とアルミニウス主義の義認教理が誤りであることをはっきり示し、2 項は、道徳律廃棄論主義の誤りを論駁することです。<sup>43</sup> ウェストミンスター信仰告白書 12 章では子とすることを説明していますが、義と認められたのなら、また、子となれたことを意味するのです。<sup>44</sup> そして、ウェストミンスター信仰告白書 13 章では聖化を扱っていますが、二重的に説明しています。つまり、聖化がキリストとの結合によって即時に起こることと、一生涯、持続されることと説明しています。<sup>45</sup> 確かにこのような説明は、聖化を無視する道徳律廃棄論主義を論駁することです。このようにウェストミンスター信仰告白書は、10 章から 13 章まで、間違いなく救いの過程の構造を持っているのです。

ウェストミンスター信仰告白書 14 章と 15 章では、救いの信仰と命に至る悔い改めとを扱っていますが、それは、聖化の次に、信仰と悔い改めを説明していることです。しかし、20 世紀のウェストミンスター信仰告白書を解説したウィリアムソン (G. I. Williamson) は、信仰と悔い改めをウェストミンスター信仰告白書 10 章の有効召命の次に、

---

43 John Leith, *Assembly at Westminster. Reformed Theology in the Making*, 269, 270.

44 大教理問答書 69 では、キリストとの結合によって、義認、子とする、聖化が起こることと説明しています。

45 ウェストミンスター信仰告白書 1 3 章 1 項は、即時に聖化(ロマ 6:6, 14) を言及していて、1 項から 3 項までは、持続的な聖化を語っています。20 世紀のウェストミンスター神学校組織神学の教授であったジョン・マレーは、決定的(definitive) 聖化と、漸進的(progressive) 聖化という用語を使用しました。



編集して置きました。<sup>46</sup> きっと、ウィリアムソンは論理的順序を、最も念頭に置いたことと見えます。しかし、ウェストミンスター信仰告白書において、聖化の次に信仰と悔い改めの順序を説明したのには理由がありましたが、まことの信仰と偽りの信仰、そして、まことの悔い改めと偽りの悔い改めとを区別させるためでした。これは、その当時、教会の敬虔を崩す偽善者と、真の信者から区別させるためだったのです。このような理由から、ウェストミンスター信仰告白書 14 章のタイトルも、救いに至る信仰となっていますし、ウェストミンスター信仰告白書 15 章のタイトルは、命に至る悔い改めです。さらに、ウェストミンスター信仰告白書は、歴史的信仰と一時的信仰を、救いの信仰から区別させておき、律法的な悔い改めも、命に至る悔い改め、あるいは、福音的な悔い改めから区別させました。<sup>47</sup>

ウェストミンスター信仰告白書 16 章は、良きわざを扱うことで、真の信仰と悔い改めの実際効果と、その証拠とを説明しました。勿論、この部分は、ローマカトリックを論駁するためです。最も、ウェストミンスター信仰告白書 16 章は、普通の分量より多いです。その理由は、その当時、流行していた道德律廃棄論主義を論駁するためです。一方で、これは、キリストとの結合が含蓄されていることを叙述しています。<sup>48</sup>

---

46 G. I. Williamson, *The Westminster Confession of Faith: For Study Classes* (Phillipsburg: P&R, 1964) 参照。

47 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines* (Edinburgh: John Johnstone; 1846), 148, 149, 155.

48 16 章 6 項を参照してください。

ウェストミンスター信仰告白書 17 章は、聖徒の堅忍を扱っています。この部分は、ウェストミンスター信仰告白書 14 章から扱っている、真の救いの恵みの証拠と、効果の部分として見ることができます。形式的な信仰告白によって教会に入って来たとしても、名ばかりの名目的な信者たちは、キリストとの結合状態ではなく、それゆえ、彼らには、聖徒の堅忍がないことを説明しています。<sup>49</sup>

神学的に聖徒の牽引に反対するアルミニウス主義を論駁するためです。

ウェストミンスター信仰告白書 18 章は、救いの確信について叙述しました。1 項では直接的に、偽善者と新しく生まれていない人々の嘘の救いの確信について論駁しています。従って、ウェストミンスター信仰告白書 10 章から 13 章までは、救いの過程の構造を持っていますが、ウェストミンスター信仰告白書 14 章から 18 章までは、真の信仰と悔い改めによる証拠と実の側面での論証として見ることができます。神学的にウェストミンスター信仰告白書 18 章は、救いの確信が不可能だと言うローマカトリック主義と、最終的救いについての確信を否定するアルミニウス主義を排撃しているのです。<sup>50</sup>

##### 5) ウェストミンスター信仰告白書 20, 23 章 : キリスト者の自由・良心の自由

ウェストミンスター信仰告白書 20 章は、キリスト者の自由・良心の自由に対する叙述です。

---

49 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines*, 173.

50 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines*, 183.

特に 2 項は、神の御言葉に違反する、人間の伝統や儀式に服従しないで自由を味わい、礼拝と信仰に関する問題に対しても、ただ神の権威だけに服従して、人間の権威には不服従する中で、自由を持つということを語っています。確かに、この条項は、人間の権威に服従して、神の御言葉に違反する教理を信じたり、そのような儀式に服従するのは、良心のまことの自由を裏切ることだと言うのです。2 項は、その当時、世の統治者と、教会の指導者によって礼拝の形式、あるいは、礼拝儀式が強要される状況を告発しながら、英国国教会とローマカトリック教会の典型的な横暴を強く批判しているのです。<sup>51</sup>

ウェストミンスター信仰告白書 23 章の国家的為政者でも、同じ内容を語っていますが、3 項で国家的為政者は御言葉と聖礼典を執行する権限や天国のカギの権威を取られてはならないと語っています。これもやはり、その当時の、エラスティアン主義 (Erastians)<sup>52</sup> 者を論駁するための内容です。国家的為政者が教会の内部問題に関与することができないことを明示しながら、信仰の論争と良心の問題を決定するのは、地方会議と総会議の権限だとしたのです。<sup>53</sup> このように、ウェストミンスター信仰告白書 20 章と 23 章は、キリスト者の自由・良心の自由を明らかに示しました。それは、英国国教会とローマカトリックの慣習に反対することでした。

---

51 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines*, 205, 206.

52 エラスティアン主義 (Erastianism) という言葉はトーマス・エラストゥス (Thomas Erastus, 1524- 1583) の主張によって由来されました。エラストゥスは教会の譴責問題と、教会と国家の関係において、国家が教会より上位にあると主張しました。

53 *Westminster Confession of Faith*, 31:3.